

# 思想の科学

昭和52年5月27日印刷（発行所）思想の科学社、昭和52年5月26日発行（印刷所）三栄印刷株式会社、昭和52年5月1日発行（出版）思想の科学社

No-106

## 主題 われわれの中の宗教

- |  |       |
|--|-------|
| 物語としての現在—宗教と労働   | 中上健次  |
| 宗教にみる思想—「邪宗門」と「沈黙」と「快樂」を中心として                          | 折原啓三  |
| 坐の文化—宗教と身体   | 山折哲雄  |
| 現代社会と宗教—現代の宗教的諸相についての雑記                                | 丸山照雄  |
| 乙姫信仰エレジー   | 梅原正紀  |
| ちちははの記—庶民のひとりの宗教的体験                                    | 小沢信男  |
| 詩論—寺の娘から親鸞様まで  | 落合誓子  |
| 人文と科学の対話—自然言語の論理分析をめぐる<br><座談会>「日本文化への墓碑銘—「菊と刀」再考」をめぐる | 石本 新  |
| 永川玲二 ダグラス・ラミス 加地永都子                                    | 室 謙二  |
| 連載 ひっこしを重ねて—見えない日本 最終回                                 | 佐藤真知子 |

6  
1979

思想の科学社発行

な体系ではないのである。

もちろん、モンテギュー文法においても、個々の語の意味は、それに対応する、内包的論理学の意味論に基づく論理的構築物である。したがって、現在行なわれている自然言語の論理分析の表面的結果だけを見ると、外部世界との接触は、まだ抽象的で、十分ではないように思われよう。つまり、ほんとうの意味はこういった論理的構築物を越えて理解されなければならないというわけである。現在のところ、理論の整備に迫られているモンテギュー文法の研究においては、こうした発想は薄であるが、言語哲学というより高い立場に立つと、このような超越の必然性が理解されるものと筆者は信じている。実際、こうした超越を介してのみ、より深い意味における人文との対話が可能であるのである。言うまでもないことであるが、このような対話と交流は、十八世紀の啓蒙主義者のように文法理論の論理構造に関する理解もなくいきなり企てられるものではない。内包的論理学を含む近代論理学の深い理解の上に立って、はじめて行なわれるのである。そして、このような交流を通じて、いろいろな言語に内在する文化の構造もワーフ理論とはちがった立場から明らかにされるのではなからうか。

以上で、科学革命後初期の啓蒙主義者たちによって企てられた人文と科学との、少なくとも物理理論などにおいては失敗に終わった、人文と科学の対話と交流の話が終わるのであるが、自然言語の論理分析についての解説から明らかのように、モンテギュー文法を通じて、一応失敗に終わった対話が、再開されたように思われる。しかも、近代論理学の成果である内包的論理学を媒介として行なわれる対話であるから、成功しなかった従来の対話より次元の高いものであるともいえる。

よう。そして、モンテギュー文法の論理と、あるがままの自然言語

が、物理学などでは想像もできないほど幅広く接触しはじめたのである。しかし、まさに述べたように、接触に際して、人工言語としての内包的論理学によるいわば人工的意味から、本来の意味への超越的移行が行なわれなければならない。そして、この超越的移行は、内包的論理学によってはじめて可能となった。従来の文法理論では及びもつかない自然言語の構造分析に基づいて行なわれるのであるから、この超越によってわれわれの言語は「豊厚く理解されるのである」と同時に、人文科学の基本である意味の問題が、具体的にまた、哲学的、思想的に解かれるのではなからうか。

人文と科学の対話は、多くの科学理論においては論理的に失敗に終わったのであるが、自然言語の論理分析という新しい分野においては、フレンシエな対話が始まったばかりである。そして、モンテギュー文法という現代的であると同時に古典的な手法を介して、自然言語に潜行、まだよく理解されていない微妙なメカニズムが明らかになりつつある。

近代論理学による人工的構築物から出発するが、それを超越することによって、人間的、また人間的な意味の世界にはいりこむというこの営みを介して、人文と科学の対話がいままでより遙かに高い水準ではじまりつつある。言語哲学という狭い領域に限られてはいるが、近代論理学というもともと近代的テクニクの、すぐれた人文的な分野におけるさやかな貢献を期待していただければ幸いである。

筆者は、ここから、人文と科学の対話が新しく発足するのではないかと考えている。

## 座談会 「日本文化への墓碑銘―菊と刀―再考」をめぐって

永川 玲二  
ダグラス・ラミス  
加地 永都子  
室 謙 二

### 「菊と刀」の持っていた束縛

室 私はおもしろかった。ダグラス・ラミスが『思想の科学』に三回連載した「日本文化への墓碑銘―菊と刀―再考」を読んできてもおもしろかった。

私の記憶によれば、この『菊と刀』の中の文章が中学か高校の国語の教科書にのっていたことがあった。なぜ国語の教科書だったのだろうかわからない。ともかく、非常にいい本、いい文章だということ、のっていたのだと思う。

私たちは戦後の生まれで、戦後民主主義教育の、GHQ占領政策の中で育ってきて、この『菊と刀』は日本の古い悪い面、日本の封建制、家族主義、軍国主義を分析していると言われて読んだ。同時になか納得できない部分があった……。

永川 どういう部分ですか？

室 ……

永川 なんとなく、ということ。

ラミス よくそういう言い方を聞きますね。何となくはずれていると感じた。なんとなく……

室 そうなんだ。どの部分かと問われるとうまく答えられない。ただ読んでいくうちに自分の中でまさしくなんとなく納得できなくなる。これはいい本だという気持ちと、そのなんとなく納得いかないという二つの気持ちがなんとも思心地悪いものだった。

ところがこのダグラス・ラミスの論文を読むと、それがいい絵か悪い絵かはともかく、はじめて『菊と刀』について、ラミス・ペネディクトについて図式があたりだ感じがして、納得できる。ああこういう本だったのか、こういう人だったのか、ということがまずわかるはじめての文章だった。この「日本文化への墓碑銘」はね。

この『菊と刀』という本はいい本だという絵がらと、まったくまち

がった、日本のことをまったく知らない学者が占領政策決定のために書いた本だという二つの絵がらを、両方とも一つのものとして自分が納得できる一つの絵がらをダグラス・ラミスの文章から得られて、私は幸福なわけだ(笑)。

『菊と刀』の持っていた東洋から自由になれた気がする。

永川 ぼくも大変おもしろく読みました。このエッセイはベネディクトにたいする大変な賛辞なんだな。つまりラミス氏は『菊と刀』を批判するということかたちで、『菊と刀』への賛辞を書いた。

ラミス 一部分はそうだね。

永川 いや、大部分がそうだとぼくは感じたよ。ベネディクト流に(念)という言葉を使うと、むかしから相模取りの社会には思慮しという考えがあるでしょう。かつて自分にいるいろいろなことを教えてくれ、育ててくれた師匠なり兄弟子なりを追いぬくこと、土俵の上の勝負でやっつけることが、何より大きな意思なんだね。そういう意味で『墨研録』はベネディクトへの思慮しになっている。だから最上の賛辞ですよ。

あなたは一九六〇年に沖縄基地ではじめて『菊と刀』を読んで、ものすごく強烈な印象を受けた。その呪縛からなかなか脱出できなかったわけでしょう。「つづめていえば、この本をみつけたことが不運だったのだ。この本が私の認識におよぼした損傷をいやし」云々とここに書いてますね。それはと深刻な影響をうけ、それを乗り越えるために七転八倒しながらベネディクト批判を書いた。だからこそおもしろいエッセイが書けたんだらうと思うけど。逆に言えば『菊と刀』そのものが、相手にとって不足のない立派な本であるからこそ、あなた

使っていない。インデックスにも出てきません。一度もその言葉を書いていないんです。水川さんはこの本を読んで日本のファシズムがわかったかもしれないけど、それは自分のファシズム体験があって、自分のファシズムについての知識があって、そこから『菊と刀』を読んだのでしょ。だから日本のファシズムがわかったのだと思う。

ベネディクトは日本のファシズムを説明しようとはしていない。水川さんが読んでような読み方を意図して書いてはいないんです。日本の文化の歴史を描こうとした。ファシズムというのはある政治制度だから、その言葉を書くのなら、政治的な説明をしなくてはならない。それにファシズムは日本のある時代でしょう。だれも徳川時代をファシズムとは言わない。彼女が書こうとしたのは、日本の一時期のファシズムではなくて、日本が変わらなかった、ということだね。昭和の軍国主義も明治も徳川も、徳川はまったく歴史を無視したわけだけど、そうしてもいいと思ったわけだ。歴史は必要ないと思った。日本は歴史の中でずっと変わらなかったから、だから、忠臣蔵から引用したり、平家物語から引用したり、明治時代の言葉、日本人の捕虜の言葉を同じようにみないしよに引用してしまおう。

永川 ファシズムとぼくが言ったのは、たしかに言葉遣いからずです。日本の軍国主義社会を、ファシズムと呼んでいいかどうか。イタリアやドイツのファシズムとは、ずいぶん異質なところがある。ただね、彼女はその異質な日本社会の特色を見事に説明しててでしょう。たとえば捕虜の話なんか、ほんとうにあの通りだね。むかしの日本陸軍は捕虜教育をやらなかった。万一捕虜になったとき、何と何としゃべっていい、何をしゃべってはいかんと、具体的な対策をちと

も頑張れたわけでしょう。

## 二重カゴ——ルース・ベネディクトの解放の器

永川 いまでもぼくはベネディクトを非常に高く買っています。なぜかと言うと、どうやら自分の個人的体験がからんでくる。十四歳のときからぼくは三年あまり陸軍の学校にいました。子供なりに軍国主義の空気を人間関係をいやというほど味わった。その日本のファシズムの体質みたいなものを彼女はじつに見事に説明している。はじめて読んだとき、自分自身の体験をびったり他人に言い当てられた感じだね。どういふわけにならなっていたのか、この本を読んでやっとなかっできたというぐらゐ大きなショックをうけました。ショック療法というのかな。多少とも自分のことがわかってきて、むしろはっとした気分だった。

ラミス氏はベネディクトを批判するとき、彼女の「姿勢」というものについていへんことだわっているでしょう。アメリカ的な雑性とか、異文化にたいする謙虚さの欠如とか。おなじアメリカ人としてあなたがそれにこだわるのは自然なことだと思ふけど。ぼくにあっては、それは大したことじゃない。いかに謙虚な姿勢でも、書いてあることがおもしろくなかったら何の意味もないんだから。自分の体験に照らしてみても、内容がどれぐらゐ正確かということだけが問題なんですよ。

ラミス 自分の体験したファシズムがわかったと言われますが、それは多分そうでしょう。

ただベネディクトはあの本の中で、一度もファシズムという言葉を使っても教えてくれないうです。ぼくたちは陸軍の学校で、戦争についてはあらゆることを叩き込まれたはずなのに、捕虜になったときの心得に關しては何ひとつ知らなかった。そもそも捕虜になるなんて、あり得べからざることだといふ、たてまえだけが大部分になっている。だから捕虜になった兵士が、はじめのうちは頑強なけど、とつぜん完全に屈んじやう。しゃべり始めると何もかも無差別にしゃべってしまうんだね。そして今度はアメリカ軍に全面的に協力する。ドイツ人の捕虜などにはめったに見られない現象らしいしどうしてそういうことになるかという原因に關しても、ベネディクトの分析はよく当たってます。

そのほか、日本陸軍内務班に当たってね、日本社会一般の身分階級をあつかった彼女の文章を読んでもみると、表面現象だけじゃなくて、裏面までつかまえてあって、実によくわかっているんだなあ。たとえば、「自分よりも上の『ふさわしい位置』を譲り出されてる人びとに對しては、あらん限りの敬意を表することを学ぶ。妻に支配されている夫、弟に支配されている兄でさえも、表向きはあいかわらず尊敬を受けている。これが基本構造なんだね。つまりサル山の序列と違つて、けんかに負けたからといって身分が変わるわけではない。形として、たてまえとしてはいつまでも残っている。しかも、そうしたたてまえの上でトップに立つ人物は、むしろ本当の実力者ではないほうがいいという微妙なしなやかになっている。これは日本の軍隊や会社や、天皇制の基盤にも組みこまれている装置でしょう。ベネディクトはその構造をもつての見事に分析した。

永川 水川さんの言葉には、熱心に『菊と刀』を弁護しているような

響がありますが、ちよつとわからないところがある。何に對して何を弁護しているのか。ダグラス・ラミスの文章の彼で『菊と刀』は私にとつて価値がなくなつたところか、新しいいろいろな価値、意味を持つようになつたと思ひます。

永川 だから「墓碑銘」は煮つめていくとペネディクト批判というよりも、「菊と刀」をどう受けとればいいのかという、一種のハウ・トゥーものなんだね。彼女のような学者だつて、もちろんいろいろ矛盾した思想や性格を持っていた。その葛藤をラミス氏は劇的に描き出してゐる。『菊と刀』という本が生まれるまでの長い過程がなまなましく目に浮かんでくる。そこが大事なところなんだ、矛盾にみちた彼女の思想の一面に多少の個人的偏見がひそんでゐるとかいいとか、イデオロギーの分析にはほくはあまり興味がない。

何にたいしてペネディクトを弁護したいのかと言いますと、人間の内部の矛盾を許容しないイデオロギー的尺度ですね。どんな矛盾があつたにしても、あるいは矛盾があつたからこそ、彼女はあれだけ内容のゆたかな本を書くことができた。しかしそれを一刀両断、イデオロギーで切つて捨てたくなる気持が、たぶんラミス氏にもほくにも多少はあるんじゃないかな。

室 それともう一つ。この本は単なる本じゃないんですね、日本では、この本はアメリカ人の一人の学者が書いた日本についての本というだけではなくて、日本の敗戦と、占領と日本人の軍国主義体験と結びつた一つの事件なのですね。『菊と刀』は本として日本の歴史の中にあってだけでなく、一つの事件としてある。その『菊と刀』事件にダグラス・ラミスは著書ルイス・ペネディクトの子供の時の体験、

ラミス だからそれはそんな簡単に、解放というように言えないと思ふ。ただ私はそういう軍国主義の体験がなかったんだから何とも言えないんだけど。

彼女は詩人でしよう、彼女はある意味で日本についての個人的な詩、絵をかいたわけですね。それを読んで、その日本を体験した人が、その通りだった、まったくその通りだったという感じだ。読むことができれば、それはすぐれた著作です。しかし彼女の事は日本についての構造的な歴史的分析ではないんです。それは助かない彼女の作つた一枚の絵なんです。だから、何て言おうか、ちよつとそこは私もつと悩んで来たんだけれども、つかまえたたり、つかまえられなかつたりという感じなんですけれども、その絵はある面で正しいところを描いてゐるかもしれないけど、歴史というのをまったく無視してゐるから、重要なものがいくつも抜け落ちてゐるものなんです。

永川 さんたちの世代が敗戦後にこの本を読んで、日本ファシズム、軍国主義についてよくわかつたのは、多分その抜け落ちてゐる部分で自分の体験、知識でうめることができたからだと思うのです。そうい

彼女の夢の方から別の光を当てたのだと思ふ。

永川 そう、ただね、彼女自身がその事件をつくり出したわけじゃない。ペネディクトが本を書くように書くと、マッカーサーの軍隊が日本を占領したという事実はすでにあつたんだし。その状態を少しでもましな方向に向けたいと思つて彼女は最後の努力をした。

だけど、どんな名著だろうと、それがどんなふうになつたか、どんなふうを利用されるかという事は、いつも両方の側でしょう。たとえばニーチェの著作がナチに利用されたり、ショーペンハウエルが安っぽい反共宣伝に使われたり。そういうことは受けとりかた、使いかたの問題なんですね。作品そのものとは関係ない。ラミスのペネディクト批判にしても、たしかにペネディクト本人にたいする批判になつてゐる部分は、やはりちよつと謙虚さが足りなかつたというぐらゐの、ひとことにつぎると思ふんだな。あとは読者への警告でしょう。

ラミス ちがうんです。以前一枚のマンガを見たことがあつたんですが、そのマンガを「日本文化への墓碑銘」を書いてゐる量中に何回も思い出したんだ。それはアメリカ式解放の換なんです。すごく簡単なので鳥のカゴがあつて、そしてドアがあいてゐる。鳥が逃げて、自由になつてワープと飛びまわつてゐるわけだけど、ただそれは全部もろ一まわり大きな鳥のカゴの中に入つてゐるわけなんです。だから、もしかして、ルイス・ペネディクトの本が、その小さなドアをあけたかもしれない。そして解放されたという感を読者が持つたかもしれないけど、彼女はもうひとつの鳥のカゴをかかしてゐるんじゃないですか。

永川 そりですらうね。それはたぶん彼女というより、アメリカ政府のカゴだけだ。

う風に読者が自分の方からその抜け落ちてゐるものをうめ合せたからこそこの本は、日本軍国主義を理解する助けになつたと思ふのです。この本だけにあげれば、ここに描かれる日本の絵は歴史の中でずっと変わらない変なものです。ペネディクトが天才であるといふことは、私はよく知つてゐる。日本文化の型、ひとつの絵をきれいに描いた。それは認めます。それとその絵に含まれる理論が正しいか、現実とあつてゐるかは、問題がぜんぜんちがうでしょう。

永川 さんは明治維新の時にかなり日本は変わったとおっしゃいました。そのかなり、といふのは大切ですね。

永川 そりです。

ラミス そのかなりは大切だけど、そこで日本が変わつたといふよりな現象は、この本の中にぜんぜん入つていません。

永川 入つてますよ。

ラミス いや書いていない。

永川 たとえば明治維新のことを「思いきつた改革」として評価してゐる。しかし、それにもかかわらず、深い部分では日本社会の構造に

## 権力の構造 岡本順一

政治権力における善と悪、ロッキード、ゲダラス、グラマン事件や総選挙を頂点とする各種選挙の不透明など、権力にからまる不徳、邪悪が限りなく深くはびこつてゐる。また国際的には超大国、大田、中小国という序列化に表徴される権力構造。本書はこの権力に総合的にせまり、開拓空間に挑戦した著作。

二〇〇〇円

### 東大法学部

大入月 小中陽太郎

### 創価学会公明党の研究

大入月 坂本守

### 戦後日本共産党の二重帳簿

大入月 亀山幸三

### 権力者の陰謀

一五〇〇円 萩野憲祐

### 国税・検査の黒い霧

一五〇〇円 高田茂登男

現代評論社

東京・京橋3-7-4 郵便東京9-412

あまりに大きな変化はなかったということが、『菊と刀』の論目でしょう。ラミスのベネディクト論も、結果においてはそれを認めてるんじゃないかな。

あなたのエッセイの最後のところに、こんなことが書いてある。「神祕化の方法は変化した。国民は以前と同じく、善美に成長する企業と政府官僚のために働きつづけている。しかもその企業や官僚の政策にたいし、国民はなんらの支配力をも実際には及ぼしえないのだ」——これはベネディクトが繰り返した古い日本のパターンがいまでも残っているというこの有力な証拠でしょう？ かつて、天皇陛下のため、八紘一宇のために死のうと言ったのが、今や企業や利益のために死のうと切り替わっただけのこと。同じパターンが相変わらず繰り返しているということであつたがはつきり証言して下さるよ。

ラミス その例ははずれてると思う。ぼくが言いたかったのは日本文化のパターンが戦前から戦後に一貫してあるということではなくて、日本の資本主義のあるかたちが、資本主義の制度の中のある部分が戦後になっても変わらなかつたということだ。

#### のりこえるべきものとしてのルース・ベネディクト

ラミス 私には戦争の体験がありませんから、こう言うところからうしろなるかもしれないませんが、私の中のベネディクトと、永川さんのベネディクトとが、ひじょうに似ているんじゃないかという感じがします。私も最初にベネディクトを読んだとき、とても自分が解放されたような感じがしました。具体的にではありませんが。私が最初にベネ

ディクトを読んだときは、ワッカイシズムの時代で、イデオロギー的な動機はなかにいたわけですね。自分の考えが時代に押し込まれて、動きがとれなかつたわけですね。そしてその時、ベネディクトの本のおかげで、自分の考え方が動き出したのです。その時の本というものは、『文化の型』ですが、だから、非常に解放的な気分がした。自分の決まってきた思想から解放された感じがした。それは、私にとって大切な第一歩でした。しかし、何て言うか、数年間たつたら次の第一歩がそこからどうしてもふみ出せないことに気がついたわけですね。まだ自分の考えが、ベネディクトの与えてくれたワタの中以上に動けなくなるのを感した。

『菊と刀』の時もそうなんです。『菊と刀』を読んだら、日本のことがだいたいわかったと思つたのです。そして、日本と日本人との間に一種の関係ができたね。もちろ、その本のせいだけじゃないんだけれども、そして、次にだんだんとこの本がじゃまになつた。師匠になつてきた。もうひとつのカゴにつかまされられた。それをのりこえなさいいけないというか、のりこえるという抽象的なことはあまりよくないんだけれども、やっぱり、そのカゴをこわさなくてはいけないと思つた。

どんなものにも副作用があるけど、彼女の本の副作用は強いと思ふ。彼女の本はある面を解放するかもしれないけれど、別のところをつかまえ、おさえこむ。

永川 彼女の分析ではなくて論であるとか、どうも文学的すぎるとか、そのところがぼくにはおもしろいんだけど、それにはたいするラミスの評価は、推しているでしょう。『ベネディクトの人類学は

ど——もつと敬服して文学的にやちなかつたところにあるだろうと思ふんです。

ラミス その的ということであれば……。

永川 いっその本物の文学にしてみればよかつたね。

ラミス だいたい、いい歴史学者、社会学者は、文学をよく勉強しているでしょ。人文科学の分野であまり科学っぽい科学——こういう言葉はありますがね。——は信用できないし、力がないと思ふ。ベネディクトの文学的なところ、イメーワのうまさとか、文学のパターンを描く時の文章はすぐれていると思う。永川さんが、私の文章は『菊と刀』の読み方をおしえてくれるというのには、ある意味で当たっているでしょう。私はその中で、書いたと思ふけど、この『菊と刀』はオーウェルの『アニマル・ファーム』のようなものと同じもの、あれはスターリニズムのソビエト・ロシアを批判的に描いた文学ですけど、あれと同じものとして読めばいいと思う。日本についての小説として。

でもベネディクトはこれを小説だとは言わなかつたでしょ。現実の

## 書評と時評そして

そしてからなのです。日本読書新聞は、書物の書評を別掲し、書物の後方へ論陣をすすめます。状況をつつと熱いメッセージを伝えていきます。時評……文藝時評/思想78/時評/短歌時評/教育児童時評/科学時評/同人誌時評

○日本読書新聞は毎週月曜日発売 八頁一〇〇円  
○お手元に確実に毎週お届けする直接購読を御利用下さい

## 日本読書新聞

■ 直接購読料 ■  
二五週(半年) 三〇〇〇円  
五〇週(一年) 五八〇〇円  
思想の科学で見たとヘガキを  
いただければ見本紙送ります

文京区水道2の6の3 電話〇三九四三三三三 振替東京7一五六九七六

日本だ、と書いた。実際に存在している国についてのレポートだ、一つの科学だとして書いた。多くの人もそう思った。

永川 観をかぶったんですね。観をかぶったおかげで、いかにも客観的、決定的な論断書であるかのように受けとられやすかったということでしょう。だけどそれはやはり受けとる側のほうの、いかに読むかの問題であってね。ぼくなんか懐疑的ですから、文化人類学にかぎらず文科系の学問にもともと有疑な示威以上のものを期待していませんし、『菊と刀』にはそれが非常に多かったわけですね。

#### ルース・ベネディクトと文化人類学

永川 「日本文化への葛藤」は、非常に鋭い批判だけど、その批判の対象は、パターンとか構造とかで社会をとらえていくこととするあの種の文化人類学、あるいは文化人類学一般のある側面にまでぼがっていると思うんです。そういう学者たちの中では、ベネディクトという人はむしろ最良のケースでしょうね。そのことはあなたも最初から意識しながら書いたでしょうね？

ルース ぼめながら批判するということは、もち論意識してのことです。この文章の一つは、自分への自己批判の面もあるわけですね。『菊と刀』を一応信じた。そこからぬけてそして何というかその場を面談しなければいけないということがひとつ。私はアメリカという国全部を代表しているわけじゃないけれども、自分の国だからこそ愛しながら情んだりして、いろいろ複雑な態度を持っているでしょう。ある意味でベネディクトは、政治的に言えばリベラリストのいちばんいい部分なんだ。今のアメリカにはリベラリストはもういないの

個性があるでしょう、二人ともにげているとか。つまりその歴史がわからないと、事実が二人が走っているだけだけれども、追いかけてるとか、にげているとかそんなこともわからない。雑な例かもしれないけど。

加地 でもそれは人類学と言われる学問が、そもそもそういうところを持っているものじゃないのですか。ベネディクトの方法論がそうだとということじゃなくて、やはり、私がルースさんの翻訳をやっているから、同時にある日本人の文化人類学者のタイのレポートを読んでいて思ったのは、両方とも対象から見返えされる自分というものがぜんぜんないんですね。ベネディクトが日本文化の分析をしていて、それを分析している自分というものがぜんぜん返ってこない。やはり相互に変えていくような緊密関係がない学問というのには、ベネディクトだけではないですね……。

#### ルース だんだん学問の批判になってくる(笑)。

#### 『ガリヴァー旅行記』と日本

永川 あなたが指摘してくれたことはいちばんおもしろかったのは、『菊と刀』という本が、文化人類学の方法を精緻の小さな部族ではなく、大きなひとつの民族国家に適用した最初の実験だったということ。しかもその後おなじことを試みて成功した例はまったくないですね。最初にして最後のケースなんです。あれがひじょうにおもしろかった。やはり欧米人にとってシヤパンというのはひじょうに特殊な対象であって、ドイツやイタリアなどに文化人類学をあてはめてみようなんてことは、まず考えもしないでしょう。やったとしても

で、そのイデオロギーはもうだいたいの死につつまらなだけれども、そのリベラリズムが生きていた時代のいちばんいい部分だし、自分もそのつもりで書いていたと思う。で、そのいちばんいいものが、どうして足りなかったのかということ、私はわかりたいわけね。それが理解できれば、自分にとって役に立つんですね。それほど立派な人、頭のいい人、想像力のある人が、そして文学的な人、文学を使ったのは悪いことだとは思っていない、文学的な社会科学はいちばんいいと思わしね、それがなんであんなひどいことを書いたか、ということをお私にわかりたいと思った。

彼女の書いている細かいひとつひとつの事実を、私は批判しなかった。私よりもっと専門家は、細かい事実のまもがいのところは批判できると思うんだけど、そういう私に対する批判も出ていたと思えますが。

彼女が歴史を無視するということは、方法論の問題だけとは限らないと思います。方法論だけだったら、別の方法を使えば同じ結論が出る可能性はあるんだと思います。質が違うと思うんだ。彼女はひとつの構造を、パターンを描こうとするけど、それがどう歴史的に作られたのかはかたろうとしない。皆が自発的に作ったか、強制的に作られたか、それは違うでしょう。

もし二人の人が走っている場面があるとする。二人が走っている活動とか構造とかを正しく説明しても、その二人が何をやっているのかということ、何もわかっていないでしょう。もしかして、一人がにげている、一人は追いかけているかも知れない。同じ走り方で走っている、同じ走り方で二人とも違う人を追いかけているとか、いろんな可

くいかないだろうと、あなたも書いてますね。それとつながるもうひとつの指摘は、スウィフトが『ガリヴァー旅行記』のなかで、現在の国の名をあげたのは日本だけだったということ。これは『菊と刀』の場合とまったく同じ姿勢ですよ。マルコポーロらしいシヤパンは相変わらず、空想上のいるいるな国と同じ扱いができるほど遠い極東の国なんだね。

ルース でも私はそんなつもりで書いたんじゃないですよ。

永川 いや、そうぼくが勝手に読んでたわけですよ。西欧世界でのイマーシオはたぶんそういうものだろうな、と。

ルース もっと簡単な面があるんだけれどもね。イギリスから二つの船で出発すれば、一つは西へ行って、一つは東へ行って日本で会ってしょう。そういう意味で日本がイギリスからはいちばん遠いんだね。簡単なことだと思っただ、一番最後に書いたところ。

永川 ただ、インドでもフィリピンでもなくて、現在の名前としては唯一つ日本が登場するというのは、象徴的なことでしょう。それやらいエグゾチックな、ひじょうに特殊な国なんだよ。クリシタン・パレンの時代にすでに、西欧とインドやフィリピンとの関係は、日本とのそれよりもずっと深かったし、実際にその土地のことを知っている人間も多かった。だから、空想物語のなかに実名を出すなんて、やばくてどうしていきませんよ。

ルース ガリヴァーに入れたということは、ちょっと予備の面があるけど、あの物語の中では、日本はそんなに不思議な国でもないんですよ。ほんとうは、日本を利用して、オランダをやっつけるつもりで書いたわけ。だから、ガリヴァーが海軍と会って、十字架を踏みな

いといわれて、それだけはかんべんして下さいと頼むでしょう。それで將軍は怒らないうて、「そうですか。でもオランダ人が断わったことは今までないんですよ。ヨーロッパではいやなことでも、オランダ人はいっしょうけんめい読みますから」と言ったという。つまりオランダ人の商売人のえげつなさをやつけるために日本を入れたんだね。

永川 そのへんもさすがにスウィフトだね、みごとな想像力ですよ(笑)。  
ベネディクトよりもっと極端なケースでしよう。日本のことなんてまるで知らなかった。うわさ話ぐらいは聞いてたんだらうけど、それだけ資料にして書いてすらあれだけ正確につかんでる。オランダ人と名乗ったからにはもう踏み絵を恐れる必要はなかったのに、オランダ人だから断乎してくれと念には念をいれたばかりに、ちよつとつたがわかるあたりがね。いかにもありそふな心理劇を非常に簡潔にとらえている。

「菊と刀」はもつとずつと念入りだし、まったく別の種類の日本論だけどね。自分で行ったこともない土地の社会構造についてあれだけ突っ込んで書けたのは、ほかのみんなも知らないという安心感がプラスのほうに働いたんじゃないのかな。いまところがつて当時はまだ専門の日本研究家がほとんどいなかったおかげだね。だからラミス氏がいま読むと、とうとうい承服できないような論議が多いという欠点もあるにちがいない。

「日本文化への墓碑銘」をどう読むか

室 アメリカ人が日本と日本人を理解しようとして、『菊と刀』を

読むとすると、その序文としてか、あるいはそれといっしょにこのラミスの書いたものを読むと非常な面白いと思えます。

永川 そうですね。

室 アメリカ人にひびくようにいいと思うし、また、私の世代が『菊と刀』を読むときにもひびくように有効だと思っただよ。

永川 だから、あれを読んだあとで、もう一度ルース・ベネディクトをよく読み返せばいいんだよ。

加地 世代的なところに困るとすれば、私などはまたみんなとぜんぜん違ふと思います。私は案さんとも違つて、高校の教科書にもルース・ベネディクトは出てこなかった。私が初めてベネディクトの『菊と刀』に出会ったのは、まあ日本人だったら読んでおいたほうがいい本じゃないかって言われたのが、大学に入ってからです。私などは、完全に占領政策の落とし子でありまして、戦争の終わった次の年に小学校に入つて、民主教育を首までどっぷりつかつた世代でありますから、大学生になってあの本を読んだときは、ほんとうにいやだった。もう何か皮膚感覚的にいやだった。身震いがした。その身震いしたまま来て、それでラミスさんが『菊と刀』をやるといふので、いやだなあと思ひながら、しようがないから、翻訳をたのまれたからもう一度読んでわけです。おもしろかったですよ、すごく。そのぐらゐ感性的にちがう感じがあるわけですよ。

ラミスさんが最後のところまで言った。あの本が占領政策のものの方を日本人に植えつけるのにひびくように大きな役割を果たした。そういうものがあつたから、日本人がすごいシレンマにおちいって、民主主義と自由というものの理念を求めたら、自分のナショナルなもの

永川 さつきラミス氏があれは自己批判だと言つてたけど、たしかに外野席からのベネディクト批判じゃないんですね。仲のいい身内どうしの内戦みたいなところがある片一方で相手の長所を認めながら、しかしこの点だけは困るといふものを、徹底的に叩きこつて行くとするでしょう。

このへんの苦心を思ひがして、「日本文化への墓碑銘」の論議を大ざっぱに読むと、「やっぱりそうか。どうせあれはアメリカ海軍情報局に頼まれて書いた本だから」といったように『菊と刀』を簡単に紙屑に捨ててしまふいい口実ができるでしょう。そんな読みかたをされたんでは、あなたがせっかくなれを書いた意味が裏返りになってしまふ。

ラミス そりいう可能性はかならずあるんだけど、ある程度読む人に読み方をまかせなければならぬから。

永川 でずから将来ベネディクト再批判を書くとしたら、『菊と刀』のイデオロギーより、具体的な内容をくわしく批判してください。これはあなたの政治学と彼女の文化人類学との真剣勝負になるでしょ。

現代の思想と文化を照射する

週刊読書人

書評 批評 情報

毎月曜日発売 定価1,200円

多彩な特集企画と連載・コラム群  
〈時評と展望〉はジャンルごとの  
時評と展望を与える一ページ。  
〈読書人コーナー〉は読書に関する  
最新の情報を与える一ページ。

好評連載 野呂邦博 小さな町にて  
定価送料 25冊 3,350円  
〈見本誌〉 50冊 6,500円  
送料別

株式会社 読書人  
東京都新宿区先斗町109  
振込5-57070/電話260-3791

う。  
 蜜 ごく一般の話として、私はアメリカ人、特に白人と会っていて日本に対する、またはアジアに対する考え方、感じ方が精悍でやだなあと感じることがよくありますよ。ところがここにダグラス・ラミスがいて、もうずいぶんと十年ぐらい日本とかアメリカでつき合っていて、話したり彼の書いた文章を読んだりいっしょに旅行したりしているとき、そういう経験があると、そのイヤなアメリカ人に対してもまあ平気になれるんだ。

ラミス そうですか (笑)。

蜜 ちやうど加地さんが最初に『薙と刀』を読んだ時に皮膚感覚としてイヤだったけど、ラミス氏の文章を読んだ後は、客観的に読めておもしろかったというのと同じようなものだね (笑)。

というの、ラミス氏は良質のアメリカ人でしょ、彼が真面目に日本とアメリカの関係を自分にひきつけて考え、アメリカの自己批判の一部をやっているわけで、こういう人間を知っていると、良質じゃないアメリカ人が会ってもおこれなくなるねえ。彼の文章にはどこか、読者に対する治療的効果があるわけで、うまく言えないんだけどアメリカに対するイヤな感じはへる。それよりこっちももつと自分に日本とアメリカの関係をひきつけて真面目に考えて、ラミス氏がするよりに自分の腹にたいする批判もちゃんとしなくちゃ、なんて思うんだ。だけどほんとうにこの『薙と刀』はほんの少し日本について知ったアメリカ人が戦むと日本について全部わかったような気になせる本なんだなあ。そういうアメリカ人が日本人に日本文化の啓蒙をしている場面に何度も出会ったと、ラミス氏も書いていて、私は出会った

どころか何度かその日本人になった。頭にくるわけです。これからはあんまりこないよ (笑)。この文章を読んで納得したところがあるから。こういう文章は、多分日米関係を改良するね。ありうべき日米関係をめざしている。

永川 それはいい批評だね。

蜜 もう一つ言っておきたい。この文章はラミス氏は日本人の読者のために英語で書いたわけだ。そしてこれからアメリカ人の読者のために、たのまれてるアメリカの雑誌のために書きなされることはない。その日本向けの英文の文章と、アメリカ向けの英文の文章のどっちが本当のラミス氏の書きたかったことなのか、どっちか一つを取れ、とは言えないわけだ。彼の言いたいことは、その日本向けの文章とアメリカ向けの文章の間に、日本とアメリカの間にあるわけですね。彼の場合は、どっちが定本なんだ、と言えない。そういうところで仕事をしている人としての文章として、私はこの文章を読みました。

#### 定期購読のお知らせ

店頭でお求めにくい方のために、定期購読を承っております。送料は小社負担です。『臨時増刊号』を必要となるかどうかを明記の上、振替(東京 五一八九〇七二)か現金書留でお申し込みください。

半年分 (書五) 二二八〇円(本誌のみ)  
 一年分 (書十) 四五六〇円(本誌のみ)

思想の科学社

#### 見えない日本

### 連載 ひっこしを重ねて 最終回

佐藤真知子

#### ブレリー・グループでの集人

メルボルンからモーニング半島を約百五十キロ南下して行くと、その一角にポイント・レオという海岸がある。ここには毎年夏になると、数百のナントやキヤラバンが点在する。我われの友人ブラウン家族も、ここで夏を過ごすこと今年で十一年目になる。末娘クリステインが生後六か月目でナントをばったのを事始め、毎年夏が訪れてくるたびに、ナントと家財道具を背負ってやってくる。

キャンプ場から木立を通りぬけて行くと、眼下に砂浜と荒々しい果てしない海原のひろがりがある。燃える太陽に海は出、また嵐のような風に、海はうねりあわ立ちほえる。雲を散らせ砂浜をなめ、そして林をざわつかす。林の葉みの中には鳥たちが棲息しており、地草はからさすひとすじの光明に羽ばたき、壮絶な明け方をつげる。そのさえずりは、生命の威力にみまざり、溢んだ春色の波紋を下界にこだま

せ、天地をゆるがせる。

ブラウン家族は我われが暮らしたところのあるベルヴェー・アベニューに住んでいる。あすかがクリステインと同じクラスになるや、帰る方向も同じとなると、二人が親密になるのに時間は要しなかった。クリステインは八歳上のクイムと互歳差のインディの三人兄弟である。インディはすでにハイ・スクールに行っており、クリステインのブラウン家での存在は、少々宙ぶらりんであった。兄や姉とは年齢の差で興味も異なり、家の中では母親に幼児のごとく甘えまことわりつくという役がらがすでに定着していた。ところが、我われがベルヴェー・アベニューに引っ越してきて、朝あすかとわらべがクリステインの家の前を走り学校へ行く日常となった。あすかは学校の行き道、帰り道にブラウン家に立ち寄り、持ち前の社交性を発揮した。母親のジャンもあすかの登場を喜んだ。